

雜 纂

故坂口博士の學歴とその學界に於ける業績 (上)

中 村 善 太 郎

一 學 生 時 代

るところであると同時に、感慨無量である。

京都帝國大學教授文學博士坂口昂先生、急性肺炎のため療養旬日を出でず、昭和三年一月二十八日溘焉逝去せらる。これ我が史學界に於ける一大痛恨事である。ことに研究困難の西洋史學開拓に畢生の努力を傾注せられし巨匠を失つたことは、實に我が西洋史學界に於ける一大損失である。三十年間師事し、直接指導の恩儀に浴し、先生の學風に傾倒せる小生が茲に先生の學歴と學界に於ける業績の一斑とを述べることは、小生の光榮とす

先生は、明治五年一月兵庫縣有馬郡大澤村に誕生、第三高等中學校を経て明治三十年七月東京帝國大學文科大學史學科を卒業せられた。當時文科大學にはランケの史風を繼承せる新進少壯のリース博士が、西洋史及び史學研究法の講義を擔當せられ、流暢明快な英語を以てその蘊蓄を披瀝せられ、異常の熱誠と懇切とを以て學生を指導せられた。坂口先生が最も多くランケの學風を受け、他日幾度となく講義に講演に論文にランケの人格學

風の紹介に努め、敬慕の情を寄せられたのは、如何に學生時代にリース博士の感化を受けられた事の深甚なりしかを示すものである。また先生と博士との學問上並びに私交上の關係が、如何に親密であつたかは、博士が日本を辭せられた後も、師弟の關係益々密接となり、先生の獨逸留學時代に益々交情を溫め近時獨逸再遊の際には博士畢生の事業たるウェーベル世界史改訂の大事業に關して後援せられ、また博士の著述の紹介翻譯等により邦人の間に忘れ勝ちなる博士の西洋史學界に於ける位置、我が學界に於ける業績を傳へることに努められたのを見ても明かである。かやうに先生は大學在學時代に博士より西洋史研究の趣味とランケの學風とを傳承せられ、困難なる西洋史學の研究に進まれたのである。

こゝに先生の大學卒業論文に就いては、當時同學の我等の諸先輩の方々に知らるゝのみで、一般

には知られないと思ふから一言したい。題目は「耶蘇會史特に其支那に於ける關係」である。先生が大正十五年五月發行の内藤博士還曆祝賀支那學論叢に寄せられしライブニッツの「支那の最近事」の論文に於て、卒業論文がランケの法王廳史を愛讀せるより思ひつかれた事が述べられて居るのを見ても、ランケの影響は既に先生の在學時代に現れてゐる。論文は二篇にわかれ、第一篇は耶蘇會の起源及び發達を、ランケ、アルツォーグ、ニコリによつて敘述せられ、第二篇は支那に於ける耶蘇會であつて、第一章耶蘇會傳道の創始期に於ては、ザヴィエー、利瑪竇、ベネデクト、ゴイスに就き、第二章耶蘇會傳道の苦争期に於ては北明南明清初の關係、徐光啓、湯若望の事蹟について述べ、第三章耶蘇會傳道の衰亡期に於ては耶蘇會内部の頽廢、ヤンセン派の勃興、在支那教法の派争、耶蘇會の康熙帝に對する政治上功勞、即ち尼布楚條約締結

の際の活躍、蘇耶會の支那並びに一般智識界に於ける功勞、支那傳道の末路を述べられ、最後に耶蘇會の滅絶、結論を説かれて居る。支那方面の參考書としては、正教奉褒、明史、朔方備乘、耶蘇教士の書翰等、更にマルチニー、キルヘルス、ブーベール、バルトリ、デユハルド等東西の史料を參考して叙述せられた。其後、先生は明治三十一年

史學雜誌第九篇第二號に載せられたマルチニ氏韃靼戰爭記、明治三十二年史學雜誌第十篇第八號に所載の在支那耶蘇會に關する研究の片々、大正十五年五月刊行の内藤博士還曆祝賀支那學論叢に寄せられしライブニツツの「支那の最近事」等は、卒業論文の副産物である。これ等によりて視ても、先生が此の卒業論文に於て多大の努力を致され、また前記支那學論叢に「當時正教奉褒やマルチニやキルヘルスなどを發見して始めて之を利用したのを自ら私かに喜びとした。といふのはこの試みが

當時若干の新味を寄與したらしかつたのを、自らひそかに喜びとした。」と述べられてゐる。これに徴しても、其後此の方面の研究は大いに發達したのであらうが、當時に於て此の論文が二十六歳の青年の所産として拔群のものであつたかゞ表證せらるゝのである。

二 高等學校教授時代

先生は大學卒業後直ちに大学院に入り「モンロー主義と日本の關係」につきて研究せらるゝ事となり、ついで和歌山縣立中學校教諭となり、明治三十一年八月母校第三高等學校教授に轉任された。先生二十七歳の夏である。小生はこゝに始めて先生の聲咳に接することとなつた。従來西洋史に關し専門家の講義を聴くことが出来ながつた小生等には、先生の豊富なる内容を要約せる、洗練されたる講義は驚異の的となつた。當時小生等數人の發起で催された講演會にて、桑原先生の佛滅年

代考と坂口先生のマハーン海上權力史論の批判とを拜聽したのも三十年の昔となつたが、兩先生のそれぞれ特異な講演振りは今もなほ眼前に彷彿としてゐる。小生の拜聽した西洋史の講義は最近世史アメリカ獨立以後であるが、當時先生の研究の中心であつたアメリカに關しては特に精密で、十九世紀中葉の世界の物質的進歩を講せられしとき、統計を利用せられたのも、粗雑な頭腦の持主であつた當時の學生に強い印象を残した。其後先生の三高に於ける講義は、先生の學殖の増加につれて益洗練せられ、校内最も出色の講義として今なほ當時の學生の間に喧傳せられて居る。先生の講義は毎年改訂せられたが、大體の組織に於ては非常な變更がなかつた。先づ緒論として古代東方、ギリシヤ、ローマ、キリスト教に就きては文化史的にその梗概を述べ、西洋文化の源流をたゞられ、ゲルマニーの移動またはローマゲルマニ諸民族の融合

の象徴であるシャルルマーニュの帝國の出現を以て本論に入るを常とした。これは明かにランケ、從てリース博士の感化を受けられたものであると思ふ。先生は學生の指導に盡さると同時に、専門の研究に没頭せられ、西洋史全般については恐らく我國の西洋史界に匹儔を見ない程の豊富な學殖は、三高教授時代の精勵の賜物であつて、浩瀚なランケの近世史に關する諸著述、難解の世界史より、稍通俗的なエーゲルの世界史の如きまで涉獵せられたやうで、ランケの學風を多く採り入れた世界史的見地に立つ先生の學風も此の時代に築かれたものと信ずる。

三 大學教授時代

明治四十年四月、京都帝國大學文學部に史學科の開設せらるゝや、先生は三高教授より文學部助教授に轉せられ、古代史中世史近世初期に關する普通講義と古代史特殊講義とを擔任せらるゝこと

ゝなつた。これ實に先生が他日我が國に於ける古代史研究の權威と仰がれ、その指導の下に少數とはいひながら、熱心なる古代研究者の現はれる端緒となつたのである。大學に於ける先生の最初の講義は、主として埃及史であつたが、翌四十一年原勝郎博士の歸朝と同時に、同年十一月西洋留學の首途につかれた。初め倫敦に在留、大英博物館今のホール氏の指導の埃及室で埃及學を研究せられ、次いで伯林に轉せられ、同大學のエドワード、マイヤー氏等につきて西洋史一般、特に古代史を研究せられ、舊師リース博士とも往來して専心研鑽につとめられた。學問に對して敬虔眞摯である先生は餘りに過度の勉強のため、同學の人々より健康上屢注意を受けられたといふ事である。また先生は常に自ら老書生を以て任じ、獨逸學生氣分を味ふため、少壯の學生等と勉強遊樂を俱にせられ、學生の會合、催物などには必ず參加せられた。先生の

獨逸及び獨逸人眞負や、青年の心理をよく諒解せられ白髮の青年として終始せられたのは、留學時代の老書生々活や、この獨逸滞在中の緊張した生活の裡から生れ來つたものであらう。またこの間先生は汎く歐洲諸國を巡歴せられ、ギリシヤ、伊太利は勿論、當時の在留者があまり足を入れぬトルコやポーランドにも遊ばれ、また埃及地方に研究旅行を試みられた。先生の旅行は、常人の見物見學と異り、頗る學問的で短期の見學の間にも何物かを掴まうと努力せられ、屢小生に送られた書翰や繪端書にも、必ず其地方に於ける感想や遺跡についての詳細な説明があつた。また此の獨逸滞在中、即ち明治四十四年、朝鮮總督府より獨逸國境地方の教育狀況の視察を命ぜられ、プロシヤ王國領ポーランド及び獨逸のエルザス、ロートリンゲン州に於ける教育狀況を視察研究せられた。その後大正二年總督府の上梓せる「獨逸國境地方の教育狀況」

はその研究の結果で、結論によると、獨逸官廳が外人の視察を謝絶した爲め公的便宜を受けず、平素の研鑽の實地踏査と調査事項につき、官公私の専門家が友人または同學研究者として好意的に頒ちくれた材料を基礎として調査を進め、同年十二月修了したとある。此書は大體に於て、政治文化の沿革を述べ、教育、教化の大要同化政策につき歴史的に述べられたもので、史學研究者にとつても頗る興味あるものであるが、官廳の秘書たる故、その詳細を紹介し得ざるを憾みとする。

かくて先生は四十四年十二月、三年の海外研究の任を全うして歸朝せられ、昭和三年一月まで十七年間史學科學生指導の任に當られ、他方その専門研究に腐心さるゝ事となつた。學生指導の懇切を極めた事と、要約的な含蓄深き普通講義と、微に入り細を穿つ特殊講義が、獨創的見解に富んだ故原博士の最近世史の講義と相並んで、學生の好

學的研究的精神を喚起した事はいふまでもない。其の後先生は官命により、大正十年六月より約三ヶ月朝鮮及び支那に出張せられ、更に、大正十一年四月、歐米へ出張を命せられ、前の留學時代に見おこされた北米の各地を巡歴、英國を経て歐洲に渡り、戰跡を踏査、獨逸の各地、ポーランドを巡歴せられ、獨逸に於ては斯界の碩學と意見を交換せられ、同年十二月歸朝、その見聞を録して「歴史家の旅」を發表された。偶大正十三年一月互に深く信頼し相提携して、京大西洋史學科の發展につとめられた原博士の逝去により、西洋史科の興廢は一に先生の雙肩にかゝり、先生の負擔責任を倍加し、且つ文學部長の激職に補せられ、その職務に忠實勵精であつた事は、名部長の名をはづかしめなかつた。然し先生の篤學なる、なほ寸暇を惜み研究に従事せられた事は、流石に頑健な先生健康を傷け、悲むべき不幸の遠因をなした事と

考へられる。

四 學界に於ける業績(上)

次には、先生が明治四十四年最初の留學より歸朝後、その逝去に至るまでに發表せられた著書、論文、講演を紹介し、その學界に於ける業績を傳へたいと思ふ。

先づ、西洋古代史に關する研究を見るに、明治四十五年四月、史學研究會に於ける「古代史研究の發展につきて」の講演は、歸朝後の最初の發表で、大正三年九月刊行の史的研究に掲載せられてゐる。これは今日なほ古代史研究の指針として、古代史研究者の必讀を要する論文で、また後に述べる史學史の研究とも見るべきである。今その梗概を紹介する。はじめに古代史の科學的研究はニールの羅馬史研究の發表にはじまるとし、その前提として、それ以前にあらはれた二つの史風を紹介せられ、第一の學風は啓蒙風の感化を受け

世界の事實を網羅するにつとむる學風とし、倫敦で出版せられた「世界史」、獨逸に於けるその翻譯、翻譯者の一人シュレーツァーの史觀、ギボンの世界史的迷信打破的の見地、モンテスキューの影響を受けしヘーレンの學風を述べられ、第二の學風は、ウインケルマン、フォッス、ウオルフの學風で、古代史そのもの、研究でなく、古代の遺物古典そのもの、歴史的研究法を建設した事を述べられ、ニールの羅馬史研究もこゝに出發せりと斷せられ、次には、ニールの學風に就きて述べられ、彼がフォッス等の感化を受け、羅馬史詩の文獻的研究に初まり、その内より客觀的に古羅馬時代の史實を摘出するにつとめし事を述べられ、また一面に、彼の歴史には幼年時代の自然的環境經濟財政界に於ける經歷の影響を受け、主觀的傾向のあらはれ居るを指摘せられ、更に彼の研究の重要な點は、羅馬史そのものよりもその研究法にあ

りとし、彼の感化を受けしサビニー、ランケを通じ
て一切歴史の研究の創始者となれりと斷じ、次に
その史風が希臘研究に及び、ベツク、ミュルラー、
クルチウスにつきつぎに傳承せられ、ミュルラー、
クルチウスが希臘の文化を理想化する惡傾向を指
摘せらる。次には歴史が十九世紀中葉の自由保守
兩主義抗爭の影響を受け、歴史家が希臘史に應用
して自家の政見を辯護せんとする風あらはれ、グ
ロートの歴史も、材料豊富、批評眼に長ずるも、純
粹の歴史にあらず、資本家の指揮するアテーネの
民主政治の辯護で、社會上の民主主義を見るを得
ざりしものと説かる。次にこの種の空想的政治的
史が、現實的傾向の政治史となり、ジーベル、ド
ロイゼン、トライチケの権力崇拜の史風に一變し
この新傾向が古代史に適用され、ドロイゼンの「亞
歷山大王及びヘレニズムス」の出現となり、ドロ
イゼンが希臘文明の維持その東方傳播をマケドニ

ヤの武力に置く事を説き、またその史風が個人偏
重に傾き、經濟關係宗教の勢力を看過せるを述べ、
次にモムゼンを現實的政治史派とし、傳説の文獻
的批判を金石文に及ぼし、法律家としても歴史家
としても傑出せる事を述べなほその羅馬史が國民
自由主義の下に批判せられ、又個人偏重の傾あり
と説かれてゐる。次には八〇年代よりシュモルラ
ー一派の歴史的經濟學派の擡頭により、ペロツホ、
ペールマン、エドワード・マイヤー氏等により希
臘羅馬の經濟研究が開始せられた事を述べられ、
またこの間に、古代東方文物の研究の進歩により
埃及學アッシリヤ學の設立となり、一切古代を世
界史的に觀察する學風起り、さきにマツクス・ツ
ンカの出現、マイヤー氏の繼承によりてその史觀
が完成され、またシュリーマン以降の發掘事業の
進展により、クラツシツク世界と古代東方との關
係の密接なる事明にせられ、古代世界に關する概

念に改訂を加ふる必要起れるを述べ、またドロイゼンにはじまるヘレニズムの研究がロード、メルレンドルフを経、ペーロやケルストにより更に廣大なる基礎の下に着手せらるゝ事となりしを説かる。

次にまた神學史方面に於ては、古代諸國民の神々の崇拜の融合の跡が研究せられ、耶蘇教の興起發達の原因としてギボンの興へし説明を排し、世界の希臘化、羅馬の天下統一等を以て説明せんとし、これ等の研究がハルナツク等により補はれ、現今の宗教史研究の學風を作れりと説かる。また一般に、文獻的批評に對する非難を駁せられ、またクラッシック文化が一個の完全で自ら作りあげたといふ考は誤りで、國民の文化は國民の傳來個性との相互關係、内外の關係等が交渉乘積して作られしものにて、國民精神は變化するといふ見地で歴史を研究すべしと説かる。また文化史に就きては、國家及び政治は文化の中心にて、リールやフ

ライタハの國家を抜きにした文化史は不具なるも國家を唯一の標準とするセーフアー氏一派の考も偏見でありまた文化史の名の下に自然科學的法則や形式的階段を設け、これに一切の史實を投げこむランブレイトも歴史を逆に考へこれを窮屈にするものと駁せられて居る。次に世界史的の意義に就きては、新世界の開發、日米の勃興により、歴史の歐洲中心説打破せられし事、古代東方の學問開け古代世界が夙に大いなる國際關係を作れる事、歴史家は歴史生活のすべての方面すべての時代に着眼し、これを批評し得る素養を要する事、また古今東西の史實を比較するは史實を闡明にする便宜法なりと説かる。この論文は先生の壯年時代の産物であるが、古代史研究の指針を示され居ると同時に、先生の當時に於ける史學に對する管見世界史的見地を窺ふに足るものである。

次に大正二年五月の藝文第四年第五號には、

「君主崇拜」につき研究の一部を發表せられ、君主崇拜が傳說的のヘーロス崇拜、歴史的偉人のヘーロス化、次でアレクサンドル大王の埃及小亞細亞に於ける神化、ヘレニスティック時代に於ける彼の後繼者の神化となり、遂に羅馬の皇帝崇拜となりとし、これをヘレニスティック文化の所産にて羅馬に大成せりと説かれ、次に崇拜につきて三個の理由を擧げられ、また君主崇拜が思想、形式、術

語に於て原始其督教と密接の關係ありと説かれ、なほその所説の典據を示されてゐる。また大正二年九月の藝文第四年第九號には、「豹尾録」の題下に史界最近の學説を紹介せられ、その中にレオンハルトのヘツチ即アマツオーネンの説を紹介せられて居る。此種の特種研究や紹介は、その學説は勿論、研究法等に於ても我が西洋史研究者を裨益する事頗る多きものと思はれるが、學問に對し忠實眞摯な先生は容易に發表されず、その數多き研究

は先生の筐底に残り、或は大學に於ける特殊講義に於てのみ發表されたる事と思ふ。我々はこれ等の研究が整理され一日も早く遺稿として世に發表されん事を望むものである。

たゞこゝにこれ等特殊研究が巧に綜合せられて終始一貫せる脈絡を保つ一大論文として世に問はれたものがある。これはいふまでもなく「世界に於ける希臘文明の潮流」で、大正五年八月京都帝國大學夏期講演會に於ける講演を補訂し、翌年九月上梓せられたものである。大正十三年七月には増訂版が發行せられ、これには古代史希臘史希臘文明に關する參考書があげられて居る。本論文の目的は、希臘思想希臘藝術の紹介でなく希臘文明の世界的使命を明にする事にある。即ち希臘文明がマケドニヤの武方、アレクサンドル大王の世界政策により東方に傳播して世界的となり、ヘレニスティック世界を現出し、羅馬の文明に影響し、中

世ビザンツ、サラセンの間に傳播し、學術復興の有力なる要素となり、更に古典主義となつて啓蒙運動と提携し、現代民族の古典研究なるローマンチック思潮の發生を促したる事を述べなほ史學の科學的研究は、古典とローマンチックの會流點に發するものと付け加へられ、最後に結論として、希臘文明は現代文明の基調で、希臘精神の自由と調和が近代の進歩の重要動力たる事、その特相たる個人主義及び世界主義は民族國民主義と兩立せざるものにあらずと述べられ、此文明が一朝民族國民を超越し、個人的宇宙的教化を目的とする文明となつてより、茲に世界人生に多大の意義を持ち世界的宗教の如きものとなり、その裡に磅礴たる精神は、永久に人生の至寶にして、文化の模範たるべきものなりと結ばれて居る。この研究は先生が多年研究された諸種の特殊研究が綜合せられた結晶であつて、その巧妙な綜合の技術以外に先生

の博識と深奥なる特殊研究の一端をも窺ひ得るのである。また此種の論文に有りがちな國家政治を看過し、また此種の記事を忌避するを誇りとする極端なる文化史風の見地が排斥せられ、また常に世界史的見地にたちて達觀せられた事は、先生の史風の一端を示すものと考へらる。なほ先生は昨年即ち昭和二年八月の京都帝國大學夏期講演會に於て學藝復興につきて講演せられ、原稿の補訂中に遠逝せられた事は、誠に遺憾の極みである。これは、前の論文の姉妹篇とも見るべきものである。